

News Letter

No. 11

2024年11月発行

WEBサイトはこちら▼



お問い合わせ/広島大学大学院 人間社会科学研究所 教職開発専攻(教職大学院) 広報担当:伊藤 優
東広島市鏡山1-1-1 TEL:082-424-7166 e-mail:yitou@hiroshima-u.ac.jp https://kyoshoku.hiroshima-u.ac.jp/letter.html

「つばさの会」

教職大学院を修了して学校現場で活躍されている修了生の方々と院生の交流の場となる同窓会、通称「つばさの会」を8月17日(土)に行いました。

院生は今年度の入学生が9期生となります。対面開催が再開されて3年目の今年度も対面とオンラインのハイブリッドで開催し、教職大学院の教員の方々も含め約50名の参加者で新たな交流や再会の喜びを分かち合う姿が見られました。

第I部では実践発表及び大学院の教員によるフォローアップが行われました。実践発表では、昨年度修了生による学校現場でのリアルな教員生活が伝わる発表や、現職で教職大学院に派遣されて修了された方による大学院での学びを活かす学校現場での授業実践の在り方についての発表がありました。教員によるフォローアップでは、曾余田浩史先生(広島大学大学院人間社会科学研究所)にご協力いただき、教職大学院を修了した後私たちに期待されることについてお話しいただきました。

第II部では参加者をいくつかのグループに分け、そのグループ内で様々なテーマについて話し合うラウンドテーブル、そして飲み物やお菓子をつまみながら自由に交流を行う茶話会といった、参加者同士の交流を目的とした活動を行いました。

ラウンドテーブルでは主に院生が修了生の方に対して、現場での過ごし方や大学院でどのような過ごし方をすべきかといった疑問をぶついたり、教員になることに対する不安や心配事を相談したりする場となっており、修了生の方々にとって初任者や教員になる前の学生がどのような悩みを抱えているのかを知るよい機会になっていたようです。

茶話会ではレクリエーションを行った後、立食形式で自由に交流しました。旧友や恩師との再会を喜んだり、8・9期生との新たな交流を楽しんだり、修了生も院生も笑顔で交流をしている姿が見られました。

皆様のご協力のおかげで本年度も無事「つばさの会」を開催することができました。今回参加できなかった院生や修了生の方々もぜひ来年以降、オンラインでも構いませんので、「つばさの会」にご参加いただき、ともに教職大学院を盛り上げていけることを願っております。

執筆 富崎 亮太
(教育実践開発コース2年)



修了生による実践発表の様子

つばさの会 プログラム

第I部 実践発表

- 専攻長あいさつ
- 教員自己紹介
- 実践発表及びフォローアップ

第II部 交流会

- ラウンドテーブル
- 茶話会
- 副専攻長あいさつ



茶話会の様子

授業紹介

『教育実践研究の技法』

(校内研修を含む)

担当 木下 博義先生・藤川 照彦先生

「教育実践研究の技法」の講義では、授業や指導方法を評価するための分析方法を学びます。数量的なデータを扱う量的分析と数量で表現できないようなデータを扱う質的分析の方法を学び、アクションリサーチ実地研究で実施したい質問紙や調査問題の作成及び調査結果の分析を授業の中で行うことができます。「尺度」「因子分析」「検定」など統計に関する聞き慣れない言葉に戸惑いますが、手を動かしながら学ぶ中で段々と理解できるようになります。また、普段は異なるゼミに所属している学生同士がお互いの研究における分析方法に関心をもって関わったり、一緒に授業を受ける広島市教育センターの先生方とも交流する機会をもったりすることもできます。

学校で働いていると自分の授業や指導方法の効果を検証する時間がなかなかとれません。しかし、自身の教育実践を振り返り、よりよくしようと学び続ける姿勢が教師には必須です。この授業を通して、授業や指導方法を評価するための分析方法だけでなく、学び続ける姿勢も体得することができます。

執筆 菊野 勇樹 (教育実践開発コース1年)

『論理的思考教育の開発実践』

担当 松浦 武人先生・藤川 照彦先生

「論理的思考教育の開発実践」の講義では、論理的思考教育に関する国内外の研究が紹介された後、それらを踏まえ、児童・生徒に論理的思考力を身に付けさせるための新たな授業の開発に取り組みます。6人のグループごとにテーマを設定し、4週間にわたって教材研究や授業準備を行います。今年度は、「運動会のリレー指導」や「単位数あたりの大きさ」「死刑制度に関するディベート学習」「地球温暖化に関するグラフの読み取り」など多様なテーマが取り上げられました。また、最終週には開発した授業の発表および検討会を行います。実際の授業場面を想定して発表を行うため、検討会では授業を行う側の視点だけでなく、授業を受ける側の視点も共有され、授業改善の視点を得ることができます。教職大学院には、幼稚園から高等学校、文系教科から理系教科まで、様々な校種や教科を専攻する学生と一緒に学んでいます。「論理的思考力の育成」を目指していても、校種や教科によって取り上げる題材や指導の仕方が全く異なっていました。

本講義では、論理的思考力を育成する方法について示唆を得られるだけでなく、校種や教科を超えた意見交流のよさや大切さを実感することができます。

執筆 奥井 大貴 (教育実践開発コース1年)

「児童の障害理解を促すためのカリキュラム開発」

益田 天喜 (教育実践開発コース2年)

私は、自閉症で知的障害をもって生まれた弟と過ごした中で得た視点や経験を小学校の教師になった際に生かしたいと思いこの研究に取り組んでいます。共生社会の実現に向けては小学校の段階での障害理解が欠かせません。そのため、私は研究を通して「小学生はどのように障害を捉えているか」「小学生ができる障害理解とは何か」について明らかにしていきたいと考えています。「障害」とは何かと尋ねるとどうしても「何か困り感をもっている人がいる」と考えられやすいです。そこで私はICFという考え方を基に、「障害」とは、個人だけがもつ「困り感」ではなくて、人・環境・社会など色々な要素が作用しあって生じる「困り感」であると小学生が気付くことができるようなカリキュラム開発に取り組んでいます。具体的には、身の回りの物(アクションリサーチ実地研究では自動販売機や遊具、かた)は「本当に「みんな」にとって使いやすいのか」を児童とともに考えたり、授業内で通常学級の児童と特別支援学級の児童が交流する場づくりをしたりすることで、児童の障害理解へアプローチしています。

私の研究

院生の研究内容を紹介!

「市民性教育における時事的論争問題学習の可能性について —生徒の当事者性と有用感・効力感の自覚を通して—」

山口 努 (教育実践開発コース2年)

当たり前の幸せの不確かさが増す世の中で、若者を中心とする政治的無関心が問題視されています。その解決には、現実の社会問題を教材として教室に持ち込み、価値判断や意思決定等の経験を積むことが効果的であると考えます。しかし多くの教員が政治的中立性の担保や時間の確保といった面から、リスクを回避するために時事的論争問題を教材として扱うことを忌避しているのが現状です。子どもたちが社会に出ていく課題はすべてリアルな社会問題です。だからこそ目の前で起きている現実の社会問題をもとに、自分の生活と照らし合わせ、他者と議論する中で、価値観や考え方が容容していく体験を積み重ねることが、社会参画時の基礎になると考えます。アクションリサーチ実地研究では、時事的論争問題をどのように扱えば子どもたちにとって必然性のある学びになるかを考え、実践しました。子どもたちがウェルビーイングの実現に向けた市民性を獲得できるよう、我々に何ができるか研究し続けたいと思います。

ご指導いただいている先生方の教育・研究より

先生のおすすめの1冊

自分にしか歩めない道なのだ 心を定めて生きていくことが大事です

教育実践開発コース

鈴木 由美子 先生

すずき ゆみこ

理事・副学長

専門分野: 道徳教育論、ベスタロッcher教育論



鈴木先生は道徳教育論、ベスタロッcher教育論を専門とされています。

今回おすすめいただいた本は「道をひらく」(松下幸之助著 PHP研究所 1968)です。この本は発行以来今でもなお読み継がれているベストセラーで、鈴木先生は30代にこの本と出会い、以降、松下氏を尊敬して氏の本を読み続けているそうです。

鈴木先生にこの本の中で印象に残ったものを二つ教えていただきました。一つは、「素直に生きる」についてです。松下氏は、逆境も尊い順境も尊い。どちらであっても与えられた境遇で素直に生きることが大切である。素直さが失われれば、逆境では卑屈が出て、順境では自惚れになると述べられています。鈴木先生は、卑屈になることも自惚れることもなく、自分に与えられた運命を素直に生きることを自身に言い聞かせ、それができていたかを毎日振り返っているそうです。

もう一つは、広島大学附属中・高等学校の校長だったときに生徒によく話した「道」についてです。松下氏は、自分には自分に与えられた道がある。それは天与の尊い道であり、自分だけしか歩めない、二度と歩めないかけがえのない道である。上り下りもあるし広いときも狭いときもあるけれども、この道を休まずずっと歩んでいくことで必ず新たな道がひらけ深い喜びが生まれると述べられています。鈴木先生からは、「教職大学院の学生が教師の道を目指したことも天与の道です。いいときもあれば悪いときもありますが、自分にしか歩めない道なのだ」と心を定めて生きていくことが大事です。」と学生に向けたエールを送っていただきました。

執筆

重廣 孝

(教育実践開発コース1年)

高尾 彩花

(教育実践開発コース1年)



「道をひらく」
(松下幸之助著 PHP研究所 1968)

学校マネジメントを専攻している方を始め、教師を志す 学生や教師として働く方にも読んでほしい1冊です

学校マネジメントコース

米谷 剛 先生

よねたに たかし

大学院人間社会科学部研究科 准教授

専門分野: 学校経営、教師教育、教員養成



米谷先生は、学校経営やスクールリーダー育成などを専門とされています。

今回おすすめいただいた本は、「5年3組リョウタ組」(石田衣良 角川書店 2008)です。この小説は、学校や子どもを取り巻くさまざまな問題に対して、小学校に赴任し4年目を迎えた青年教師が子どもと同じ目線で正面から向き合っていく奮闘物語です。米谷先生は、「学校マネジメントを専攻している方を始め、教師を志す学生や実際に教師として働く方にもこの小説を読んでほしい。子どもはもろんなこと、一緒に働く同僚の大切さを改めて感じてほしい。」と仰っていました。

この小説では途中、ある一人の子どもが巻き込まれてしまった事件を主人公の青年教師が受け止め、ともに責任を背負う場があります。報道陣を前にした記者会見で、青年教師はその子どもの苦悩を思い浮かべつつ、「…あの子には、ほくからも謝りたいです。気づいてあげられなくて、ごめん。毎日しつよにいたのに、苦しいのがわからなくて、ごめん。そう伝えたいです。」と涙ながらに言葉を紡ぎます。米谷先生は、「学校は、教師が子どもを育てる場なのか。それとも子どもとともに育つ場なのか。どちらの側に立つかによって、マネジメントの見え方が違ってくると思います。」と語ってくださいました。さらに、「マネジメントの土台にあるのは、子どもと先生をいかに大事に育てていくのか、その人たちが育つような学校をいかに創るかだと思います。」とも語ってくださいました。私たちが研究という営みを通して、教師としての心構えや在り方を不断に問い続けなければならないと学ばせていただきました。

執筆

水野 太就

(教育実践開発コース1年)

大岡 鉦子

(教育実践開発コース2年)



「5年3組リョウタ組」
(石田衣良著 角川書店 2008)

多様な子どもに対し思いやりをもった先生と出会い、 自分らしく過ごすことができたことに共感

教育実践開発コース

山崎 茜 先生

やまさき あかね

大学院人間社会科学部研究科 講師

専門分野: 社会科学、心理学、教育心理学



山崎先生は教育相談・生徒指導、学校心理学を専門とされ、子どもの心理・社会的成長・発達をどのように教育で支えていけばよいかについて研究されています。

今回おすすめいただいた本は、山崎先生が愛読されている「窓際のトットちゃん」(黒柳徹子 講談社 1984)です。これは著者である黒柳徹子さんの小学校時代の自叙伝です。

本の内容は、黒柳さんが自身の特性により、公立小学校から私立小学校に転校することになってしまいましたが、そこで出会った先生と学校の教育方針のおかげで、自分らしく生きることができるようになったというお話です。山崎先生は、黒柳さんの経験に共感できる部分が多いそうで、先生自身幼少期はいろいろなことに興味があり、活発な子どもだったそうです。山崎先生も幸い、在籍していた小学校の担任の先生が、多様な子どもに対し思いやりをもった先生であつたため、自分らしく過ごすことができたそうです。

山崎先生は「教育では、大人だろうと子どもだろうと、一人の人間として接することが重要だ」と仰います。それでも、日々の教育活動や子育てで、人との関わりに悩むときもあります。そのようなときに、折に触れてこの本を思い出し、教育の本質に思いを馳せるそうです。

今回紹介した本を通して私自身、自分らしく学ぶことや他者理解の意義を再認識しました。みなさんも、自身の信念に通ずる本を見つけてみてはいかがでしょうか。

執筆

宮崎 瑞基

(教育実践開発コース2年)

十川 大夢

(教育実践開発コース1年)



「窓際のトットちゃん」
(黒柳徹子著 講談社 1984)

編集後記/第11号

広島大学教職大学院ニュースレター第11号をご覧いただき、ありがとうございます。今回の号では「つばさの会」に関する記事を掲載しました。修生と先生方や院生が交流できる貴重な機会を生かし、教職大学院での学びをより良いものにしていきたいと思っております。最後にご協力頂いた先生方、院生の皆さまに厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

担当/坂川 大樹
(教育実践開発コース1年)